

図画工作科指導におけるモダンテクニックの活用と効果

Application of the Modern Technique in Drawing and Crafts and Its Effectiveness

山本 和久 (Kazuhisa YAMAMOTO)

1 はじめに

1.1 問題の所在

右の作品は、小学校2年生のA児（当時8歳）が描いた絵である。この作品は教科書「日本文教出版1・2下」に掲載されている題材名「ひみつのたまご」^{注1}に取り組んだ際のものである。

A児はダウン症児であり、知的にも健常児に比べ3歳程度の遅れが認められた。A児の絵の表現の発達段階は、下記のハーバート・リードの分類に従えば、「叙述的象徴の時期」に該当する。



図1 A児作品「ひみつのたまご」

ハーバート・リード(Herbert Read)の分類^{注2}

- (1) 落書きの時期(2~4歳): 目的のない落書きから始まり、目的のある落書きに至る。
- (2) 線の時期(4歳): 人の形を得意とするが、すべて線により表現する。
- (3) 叙述的象徴の時期(5~6歳): 象徴的な略図のような表現。
- (4) 叙述的写実の時期(7~8歳): 見たものを描くというより、知ったこと知っているものを描く。
- (5) 視覚的写実の時期(9~10歳): 輪郭だけで描いていたのが、実物のように描きたいために立体的に描こうとする。
- (6) 抑圧の時期(11~14歳): 思うように描けないため失望し遠ざかる。
- (7) 芸術的復活の時期(青年前期)

当時のA児は、線描ではあるがものの形は少し描くことができるようになっていた。しかし、メインのたまごをどうデザインするか、背景をどのように表すかまでの表現技術はまだ持ち合わせてはなかった。そこで、図画工作の他の時間に造形遊びとして取り組ん

ていたモダンテクニックを活用することにした。今回この作品に取り入れたモダンテクニックの技法は、スクラッチ、デコルコマニー、ドリッピング、ビー玉の軌跡、にじみたらし込み (wet in wet) 等、A 児の実態及び発達段階を考慮して選んだものである。その取り組みの様子については、拙稿『児童の実態及び発達段階に応じた支援のあり方について ～発達障がいをもつ児童へのレッジョ・エミリアアプローチを通して～』^{注3}においても紹介している。モダンテクニックは、どのような発達段階の児童でも取り組める絵画技法であり、偶発性を生かした表現が可能となる。

しかし、モダンテクニックによる偶発的表現だけでは、絵の背後にある子どもの個性をそうした偶然の効果を狙った形象にすり替えてしまう危険性もある。たしかに、モダンテクニックを活用した偶発的表現は、表現の技術的に未熟な児童にとっても楽しく取り組むことができ、魅力的な技法である。造形遊びとして技法体験するのであれば、その楽しさ・面白さを感じることができれば、その目的は達成したと評価することもできる。しかし、絵画作品として制作に取り組む場合は、児童個々の個性やその作品で表したい「想い」「世界観」は、モダンテクニックにより偶然出来た形象にすり替えられてしまい、児童が表現したかったものが十分表現できないという状況も考えられるのである。

そこで、この A 児の作品制作の指導においては、A 児が自分で描いた動物や昆虫、魚などをハサミで切らせ、それらを画面の好きな場所にコラージュさせることにより、自分の世界観を自由に表現させることにした。この取り組みを通して、A 児はモダンテクニックを効果的に活用しながらも、自分の「想い」や「世界観」を表現できたのではないかと評価している。

ところで、小学校・特別支援学校等の指導者育成を担う大学で実際に図画工作に関する教育を担当すると、図画工作への苦手意識を持っている学生が相当数いることに気付く。授業では、学習指導要領や指導案作成及び理論研究と共に絵画・デザイン工作領域の指導法について、実際に作品制作演習を通して学ぶことができるよう計画している。その際、デザイン・工作の作品制作演習時には学生もそれほど苦手意識を持たずに取り組むことが出来ているが、絵画の作品制作演習時には、取り組む前から抵抗を感じている学生が毎年何割かいる。初回授業時のオリエンテーション時に受講生の意識調査をしているが、「小学校時代図工は好きな教科だったが、絵を描くことはどちらかというと苦手」との回答は筆者が授業を担当して以来、毎年複数確認された。

その理由として考えられるのは、幼児期から小学校に就学し、中学年・高学年になるにつれてリアリズムの見方が芽生え、そのリアリズムに見合った表現力が伴わないために苦手意識が生じることによるものである。先のハーバート・リードの分類に「抑圧の時期」(11～14歳)というものがある。つまり「思うように描けないため失望し遠ざかる」時期である。その後、「芸術的復活の時期」(青年前期)へと続いていくわけであるが、ハーバート・リードによれば、この「芸術的復活の時期」に到達できる者は少数であると分析している。その結果、絵を描くことに苦手意識を持つ教員志望学生が確認されることになる

のであろう。

このような絵を描くことへの苦手意識は、造形表現や図画工作の表現活動教育を進めることに対して消極的な要因となる。更に、中学校に入るとそのような苦手意識は「好きではない、嫌い」という意識に変わってきていることが多い。そのため、小学校・特別支援学校等で指導者を志す学生に対して、図画工作に関する教育を行う時には、まず、図画工作（特に絵画制作）に対する苦手意識を無くす方法を考える必要があると考える。では、どのような方策をとれば、この苦手意識を無くすことができるのであろうか。そこで、一つのヒントになるのが、先に紹介した A 児の作品である。この A 児の作品の中に、また、作品を制作する取り組みの中に、図画工作（特に絵画制作）への苦手意識を軽減するための貴重な方策の可能性があると考え、次節の通り仮説を立てた。

1. 2 仮説と目的

学生の苦手意識を形成する理由として「うまく絵に描けないから」が最も多く挙げられている。つまり、目に見えているものや想像したことが「上手く絵に描けない」との思いが継続しているということである。そこで、「具体的なものの形を描くのが苦手でも、偶然にできる形や色を利用したモダンテクニックを活用することにより、図画工作—特に絵を描くこと—への苦手意識を軽減する有効な方法になるのではないか」との仮説（1）を立て、図画工作の指導法に関する科目で取り入れることにした。

ただ、モダンテクニックを活用するだけでは、第 1 節においても指摘したように、絵の背後にある子どもの個性を偶然の効果を狙った形象にすり替えてしまう危険性もある。そこで、「モダンテクニックを有効に活用し、さらに自分の想いや世界観を表すためのパーツを準備してコラージュしていくことにより、自分の表現したかった絵画作品を制作することができるのではないか」との仮説（2）を立てた。検証としては、受講学生の意識調査の他、学生が授業で制作した作品分析により行う。

2. モダンテクニックの種類

現在、図画工作科教育における指導法について筆者が担当している授業に於いては、次頁の 14 種類のモダンテクニック演習を行っている。授業では、まず一通り各技法について説明及び実演し、その後パイキング形式で各自やってみてみたい技法から取り組むようにした。

モダンテクニックは高度な技術は必要ないため、様々な発達段階での実践にも対応し、偶発性に加えて遊びの要素も含むことから、ハーバート・リードの言う「抑圧の時期」を乗り越えることが出来ず、絵を描くことに苦手意識を持っている学生にとっても抵抗なく取り組める技法演習となることが期待される。また、モダンテクニックは技術的な巧拙が現れにくく、偶然を含んだ予想外の新鮮さや表現効果が得られるため、絵画制作に苦手意識をもつ学生にとっても、意欲を喚起し、積極的に表現を楽しめるようになる点で効果的

であると考えた。

表1 モダンテクニックの種類

① スクラッチ	下塗した色の上に他の色を重ねて塗り、上の色を引っ掻くと下の色が現れる描画技法。
② ドリッピング	筆や刷毛にとった絵具を、紙などに滴らせたり、それを息やストローで吹いたりして描く描画技法。
③ デコルコマニー	紙などに絵具を垂らし、乾かないうちに二つ折りや他の紙などで圧力をかけることで、絵具が押しつぶされて偶然にできる形や濃淡を求める描画技法。
④ バチック	クレヨンや油絵具など油性の画材で描いた上に、水彩絵具などの水性の画材を塗ると、はじきによる色彩の効果が得られる描画技法。
⑤ フロッタージュ	凹凸のある素材の上に紙を重ね、上から鉛筆やコンテなどでこすり、形を浮き立たせる描画技法。
⑥ スパッターリング	目の細かい網の上で絵具をブラシでこすることによって、霧状になった絵具をかける描画技法。
⑦ スタンピング	凹凸のある素材に絵具をつけて、それを紙などに押しつけて（スタンプして）写し取る描画技法。
⑧ にじみたらし込み (wet in wet)	紙などに水や絵具を塗って濡らし、乾かないうちに別の色を乗せてできる色のにじみを活かす描画技法。
⑨ マーブルリング	水よりも比重の軽い絵具を水槽の上に垂らして浮かべ、そこにできた模様を紙に写し取る描画技法。
⑩ コラージュ	画面に、断片化された別の素材、特に既製品の一部などを貼り付ける技法。
⑪ ステンシル	型紙の模様を切り抜いた部分に染料や絵具を刷り込む版画の技法。フランスなどの美術印刷では、今でも一部でこの技法が用いられている。
⑫ ビー玉転がし (ビー玉の軌跡)	紙がちょうど入るくらいの紙箱を用意し、その上から絵具をつけたビー玉を落とす。箱を大きく揺ると、その軌跡が紙に描かれる。
⑬ フィンガーペインティング	指や手に絵具をつけて絵を描くこと。
⑭ シャボン玉版画	プラスチックコップ等の容器にシャボン玉液を入れ、インクや水溶性絵具で着色する。ストローでブクブクと盛り上がるように泡を立て、その上に紙を被せて泡の模様を写し取る技法。

3 教科書題材に見るモダンテクニックの活用

図画工作科の検定教科書としては、現在小学校において「日本文教出版」のものと「開隆堂出版」のものが使用されている。何れの教科書も令和2年に最新版が発行されたが、造形遊びや絵画領域においても以前の教科書に掲載されていた題材と違いが認められる。現在使用されている以前の教科書には、リアリズムに見合った表現力が求められる「写実的」傾向の題材が多かったが、現在使用されている最新版の教科書には、偶発性を活かした活動から生まれる素材を子どもの表現へと結びつける題材が増加している。

本章では、「日本文教出版」と「開隆堂出版」の両教科書における造形遊び・絵画領域の題材分析をすることにより、モダンテクニックが図画工作科教育においてどの程度取り入れられているのか検証したいと考える。表中の分析において、題材の中で活用されているモダンテクニックについては太字にて表記した。

3.1 図画工作科教科書の分析―「日本文教出版」^{注4}

学年	題材名	主な活動(使用する主な画材/技法)
1・2上	○やぶいたかたちからうまれたよ ○ぺったんコロコロ ○でこぼこはっけん! ○うつしたかたちから ○クレヨン・パスでかいてみよう	・破いて出来る形を見つけ工夫して表す(折り紙、クレヨン/ コラーージュ) ・写し方を工夫し色々な形を見つける(絵の具、ローラー、プラスチックコップ/ スタンピング 、ローラー遊び) ・でこぼこの形や写した形を見つける(色鉛筆、コンテ/ フロッタージュ) ・写して出来る形を見つけ、工夫して表す(絵の具、クレヨン/ スタンピング) ・クレヨン、パス、絵の具の使い方の説明(クレヨン、パス、絵の具/ パチック)
1・2下	○ふしぎなたまご ○とろとろえのぐでかく ○たのしくうつして ○クレヨン・パスでためしてみよう	・思いにあう形や色を見つけ、工夫して表す(絵の具、クレヨン/ コラーージュ) ・指や手で描いて形を見つけ、工夫して表す(液体粘土、絵の具/ フィンガーペインティング) ・写して出来る形に気づき、工夫して表す(絵の具、クレヨン、ペン/ ステンシル) ・クレヨン・パスの技法紹介(クレヨン、パス/ スクラッチ)
3・4上	○絵のぐ+水+ふで=いいかんじ!	・絵の具で出来る色や形の感じを見つけ、工夫して表す(絵の具/ スパッターリング)

	○ことばから形・色 ○土でかく	・想像したことに合う形や色を見つけ、工夫して表す（絵の具、クレヨン/ にじみたらし込み ） ・土の色や、描いて出来た形の感じを見つけ、工夫して表す（土、ボンド/ フィンガーペインティング ）
3・4下	○絵の具でゆめもよう ○まぼろしの花	・色々な表し方を試しながら、表したいことを考える（絵の具、様々な用具/ スパッタリング、ビー玉転がし、ステンシル、ドリッピング、にじみたらし込み、スタンピング ） ・想像した花の感じに合う形や色を見つけ、工夫して表す（絵の具、コンテ/ ドリッピング ）
5・6上	○心のもよう ○言葉から思いを広げて	・描いた形や色のもつ特徴を捉えながら、工夫して表す（絵の具、クレヨン、コンテ/ ドリッピング、ステンシル、スパッタリング等 ） ・言葉から感じたことを形や色で捉え、表し方を工夫する（絵の具、コンテ、ペン/ スパッタリング、パチック、ドリッピング等 ）
5・6下	○言葉から想像を広げて	・言葉から感じたことを形や色として捉え、表し方を工夫する（絵の具、パス、コンテ等/ スパッタリング、にじみたらし込み、ドリッピング等 ）

3.2 図画工作科教科書の分析—「開隆堂出版」^{注5}

学年	題材名	主な活動（使用する主な画材/技法）
1・2上	○クレヨンやパスとなかよし 〈こすってうつして〉 ○さわって かくの きもちいい！ ○スタンプ、スタンプ！	・クレヨンやパスで描くことを楽しむ（クレヨン、パス/ フロッタージュ ） ・手や指で描く気持ちよさを感じて楽しむ（絵具、液体ねんど/ フィンガーペインティング ） ・身の回りにある材料を使ってスタンプする（絵具、手や紙コップなど/ スタンピング ）
1・2下	○ぼかしあそびで 〈ゆびやティッシュペーパーで〉	・色々なぼかしかたを工夫する（クレヨン、パス/ ステンシル ）

	<p>○ふしぎな いきもの あらわれた</p> <p>○大きく そだて びっくりやさしい</p> <p>○いろいろもよう〈あわの形をうつしたり、おってそめたり〉</p> <p>○えのぐを たらした かたちから</p> <p>○いっぱい うつして</p>	<p>・白いクレヨンで描いた絵に絵の具を塗る (クレヨン、パス、絵の具/パチツク)</p> <p>・形や色を工夫し、びっくり野菜の秘密を考える (クレヨン、パス、絵の具/スクラッチ)</p> <p>・模様の作り方を工夫する (シャボン玉液、絵の具、インク/シャボン玉版画、にじみ)</p> <p>・絵の具の模様からお話を考える (絵の具、洗濯糊、クレヨン、パス/ドリッピング)</p> <p>・繰り返しや重なりなど写し方を工夫する (ローラー、インク/ローラー遊び)</p>
3・4上	<p>○にじんで広がる 色の世界</p> <p>○でこぼこさん 大集合</p>	<p>・にじみで出来る形や色の組み合わせを工夫する (絵の具、ペン/にじみたらし込み)</p> <p>・版の作り方や写し方を工夫する (版の材料、インク/スタンピング)</p>
3・4下	<p>○絵の具のぼうけん、たのしさ発見!</p> <p>○へんてこ山の物語</p> <p>○絵をよく見てみよう。何がかかれていますのかな。どんな形や色・・・</p> <p>○絵の具を使った表し方をくふうしよう〈ぞうけいのひきだし〉</p>	<p>・身の回りのものを使って、絵の具遊びをする (絵の具、様々な用具/スパッタリング、ドリッピング、スタンピング、ブラッシング、ビー玉転がし等)</p> <p>・へんてこ山の形からお話を考える (パス、絵の具/スクラッチ、スパッタリング、にじみたらし込み等)</p> <p>・形や色で感じた音を表す (クレヨン、パス/ぼかし)</p> <p>・一枚の画用紙に表し方を組み合わせる (様々な用具、絵の具/デコルコマニー、スパッタリング、ビー玉転がし、マーブリング、ブラッシング、ドリッピング、ローラー遊び、ぼかし)</p>
5・6上	<p>○形を集めて</p> <p>○進め! ローラー大ぼうけん</p>	<p>・形の集め方や並べ方を工夫する (色鉛筆、インク/スタンピング)</p> <p>・ローラーの特徴を生かして表し方を工夫する (ローラー、インク/ローラー遊び)</p>
5・6下	<p>○時空をこえて</p>	<p>・行きたい場所や時間から表したいことを考える (絵の具、クレヨン、パス、ペン/スクラッチ、にじみたらし込み等)</p>

3.3 考察

第1節、第2節の教科書題材の分析により、以下のことが明らかになった。

・日本文教出版、開隆堂出版の両教科書において、1年生から6年生まで全ての学年に亘ってモダンテクニックを活用する題材が取り上げられている。

・「1・2上」から「3・4上」までは、「たのしくうつつして」（日本文教出版1・2下/スクラッチ）や「ふしぎないきものあらわれた」（開隆堂出版1・2下/バチック）など、モダンテクニックを技法体験する学習活動を中心とした題材が多く見られる。

・日本文教出版の教科書においては、3・4年下「絵の具でゆめみよう」の題材において、6種類のモダンテクニックについて学習するようカリキュラムが作られている。また、開隆堂出版の教科書においても、3・4年生下「絵の具を使った表し方をくふうしよう」の題材において、8種類のモダンテクニックを学習するようカリキュラムが作られている。一方、5・6年の題材においては、両方の出版社の教科書ともモダンテクニックの習得が主目的ではなく、作品制作において4年生までに身に付けた技法を必要に応じて表現に生かす形で扱われている。

以上のように、現在使用されている図画工作科教科書の題材分析により、造形遊び・絵画領域においてモダンテクニックの指導及び活用は重要視されていると捉えることができる。また、「言葉から思いを広げて」（日本文教出版5・6上）や形や色で感じた音を表す「絵をよく見てみよう。何がかかっているのかな。どんな形や色・・・」（開隆堂出版3・4下）のように、「言葉」や「音」といった目では形を認識することが出来ない抽象的な概念・感覚を絵で表現する題材も収録されている。このような題材においても、モダンテクニックは児童が表現する上で大変有効な描画技法となると思われる。

これまでの分析・考察により、誰でも偶然の効果を得て表現することができるモダンテクニックは、絵を描くことに苦手意識を持つ児童にとっては、その苦手意識を軽減させることができる有効なツールであると言えることができる。更に、「言葉」や「音」といった抽象的な概念や感覚を色と形で表現する造形活動においても、モダンテクニックは児童にとって、表現することへの抵抗を軽減してくれる心強いツールになっている。

4 作品分析

本稿第1章第2節において、次の仮説を立てた。

仮説(1)「具体的なものの形を描くのが苦手でも、偶然にできる形や色を利用したモダンテクニックを活用することにより、図画工作—特に絵を描くこと—への苦手意識を軽減する有効な方法になるのではないか」

仮説(2)「モダンテクニックを有効に活用し、さらに自分の思いや世界観を表すためのパーツを準備してコラージュしていくことにより、自分の表現したかった絵画作品を制作することができるのではないか。」

この仮説を検証するために、筆者が担当している1年生開講「初等図画工作」の授業

において教材開発として取り組ませている題材名「ふしぎな たまご」の学生作品を分析していくことにする。この題材は、確認できる限りではあるが教科書改訂を経ても三代に亘って「1・2下」（日本文教出版）の教科書題材として収録されている。

授業においては、最初の2時間で14種類のモダンテクニックについて実演しながら技法説明を行い、その後バイキング形式で受講生に技法体験をさせる。その際、演習で出来た様々な偶発的表現の断片は捨てずに残しておき、「ふしぎな たまご」の作品制作の時に活用するよう指示をした。

〈作品分析1〉

下の学生作品1「春」にはモダンテクニックとして、シャボン玉版画、スクラッチ、スパッターリング、ビー玉転がし、ステンシル、ドリッピング、バチック、にじみたらし込み、コラージュと9種類の技法が確認出来る。大きなたまごには「シャボン玉版画」が利用されており、赤いシャボン玉模様の重なりが美しく表現されている。中央のテントウムシも「コラージュ」で表現されており、描画で写実的に描く必要はない。背景には「にじみたらし込み」の技法が効果的に利用されている。絵筆による描画で春のイメージを表現するのは難しい面もあるが、このようにモダンテクニックを活用することにより、自分のイメージを絵筆で描くよりもずっと簡単に表現することが出来たのではないかとと思われる作品である。

また、学生作品2「Jewely galaxy」にはモダンテクニックとして、スクラッチ、ステンシル、マーブリング、スパッターリング、バチック、コラージュと6種類の技法が確認できる。たまごには「スクラッチ」が利用されており、色鮮やかな宝石がスクラッチにより表現されている。また、「マーブリング」や「ステンシル」、「バチック」などの技法で描かれた断片も効果的に「コラージュ」され、画面全体に宝石がちりばめられた構図的にも素晴らしい作品になっている。一つ一つのパーツを絵筆で描いていく場合は、描き始めたら構図を簡単には変更できないが、このようにパーツをコラージュしていく制作手順の場合は構図を確認しながら制作を進めることができるので、絵を描くことに苦手意識を持っていた学生にとっても取り組み安かったのではないかと考えられる。



学生作品1 「春」



学生作品2 「Jewely galaxy」saku

〈作品分析2〉

右の学生作品3「アート」はその作品名からも分かるように、画面の中には題材の「ふしぎなたまご」以外、明確に何かを意識して表したりアリズム的形象は確認出来ない。この作品3には、モダンテクニックとしてデコルコマニー、パチック、スクラッチ、ビー玉転がし、ブラッシング、コラージュの6種類の技法が確認出来る。モダンテクニック演習の際に偶然生まれた形象の断片を利用し、それらを一つの画面の中に再構成することにより作品化していることが分かる。しかし、作品をよく見ると、構図やデザイン、断片の配置の仕方には工夫が見られ、まさにタイトル通りの「アート」作品となっている。この作品のように、何か具体的に表したいものや世界観が思い浮かばない場合、モダンテクニックを使って生まれた偶然性による形象をコラージュしながら構成していくことにより、一枚の絵画作品が生まれるということである。これは、絵画制作の苦手意識を軽減させるだけでなく、モダンテクニックを使うことで、自身の持つ表現力とは別に偶然に出来る形や色を純粋に楽しむことをモチベーションとした意識改革にも繋がるのではないかと考えられる。



学生作品3「アート」

〈作品分析3〉

作品分析2で取り上げた作品とは対照的に、モダンテクニックを使用することにより、絵に込めた自身のメッセージを強烈に表現することに成功している作品も見られる。学生作品4「たのしい夢の空間」では、画面一面にドリッピングが施されており、ディズニーの世界観を印象的に表現している。また、学生作品5「鳳凰」では、赤色のドリッピングを効果的に使用することにより、鳳凰の躍動感を力強く表現している。絵を描くことに対する苦手意識の軽減という消極的な理由だけではなく、モダンテクニックの活用は、自身の絵の主題をより鮮明に表現することの出来る有効なツールでもあることが分かった



学生作品4「たのしい夢の空間」



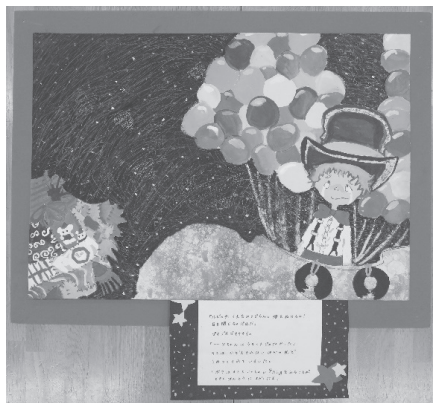
作学生品5「鳳凰」

〈作品分析4〉

下の学生作品6・学生作品7は、「初等図画工作」の授業ではなく、2年生開講「図画工作科教育法Ⅰ」の授業において教材開発として取り組ませていた題材名「物語から広がる世界」(日本文教出版「5・6上」「5・6下」)の学生作品である。なお、この題材は平成29年発行の教科書に収録されていたものであり、令和2年発行の最新版には収録されていないため、令和3年度以降の授業においては最新の教科書に収録されている題材を考慮した課題に変更している。

さて、「物語から広がる世界」の題材の教材開発として取り組ませる際に、授業では事前にモダンテクニックについての説明・実演及び授業の残り時間での実技体験を1時間のみ行った。これは、「初等図画工作」を履修していない学生への指導の必要性を考慮したからである。そのため、この題材での作品制作においては必ずしもモダンテクニックを使用する必要はないと指示したが、多くの学生が自分の作品の中にモダンテクニックを効果的に取り入れていた。学生作品6では、前方の岩には「シャボン玉版画」、背景には一面「スクラッチ」技法が使われており、物語から広がる世界をより豊かに表現することが出来ている。また、学生作品7では、動物のシルエットの部分に「スクラッチ」が使われている。シルエットは通常は黒のみで表現されることが多いが、黒のシルエット部分にスクラッチ効果を取り入れたことにより、色彩的にもより美しい表現に繋がっている。

このことから、モダンテクニック技法の活用は、絵を描くことに対する苦手意識の軽減において有効であるだけでなく、より豊かな表現をする上でも大変有効なツールであると言えるだろう。



学生作品6 「えんとつ町のペル」



学生作品7 「ブローメンの音楽隊」

おわりに

以上、本研究においては、絵を描くことに苦手意識をもつ教員志望の学生に対して、モダンテクニックを活用した偶発的な表現技法の指導はその苦手意識を軽減させることに効

果的であったかどうかについて、授業で制作した学生作品を分析することにより検証してきた。そして、次のような結論を得た。

仮説（１）の絵画制作における苦手意識の軽減については、通常絵画制作の場合、描き始める段階において「何を描こう」「どうやって描こう」となかなか制作に取り掛かることの出来ない場合が多いが、題材「ふしぎな たまご」の取り組みでは、そのような場面はほとんど見られなかった。作品分析１～３で紹介した作品のように、技法として習得したモダンテクニックを効果的に組み合わせ、偶然性により生み出された形象の断片を再構成することにより作品を完成させることが出来た。写實的に描かなければならないという呪縛からも解放されたことで、学生にとっても取り組みやすく、絵画制作への苦手意識の軽減に繋がった。授業で学生が完成させた作品としては、この作品分析１で紹介した作品と同じように制作されたものが多かった。また、授業のオリエンテーションにおいて絵を描くことに苦手意識があると話していた受講生も、モダンテクニックを活用した絵画作品制作においては抵抗を感じることは少なかったとの回答が多かった。

また、仮説（２）の自分の想い・世界観を表現することにおいて、モダンテクニックで偶然生まれた表象のコラージュの利用についても、その効果が認められた。作品分析２で紹介した作品は、特に写實的なイメージを意識したものではなかったが、モダンテクニックを使うことで、自身の持つ表現力とは別に偶然に出来る形や色を純粋に楽しむことをモチベーションとした意識改革にも繋がっている。さらに、作品分析３・４で紹介した作品のように、モダンテクニックの活用は、絵を描くことに対する苦手意識の軽減という消極的な理由だけでなく、自身の絵の主題をより鮮明に表現することの出来る有効なツールであることも分かった。

本研究は、教職を目指す学生の絵を描くことに対する苦手意識の軽減についての方策として、モダンテクニックの活用と効果について分析・考察してきたが、純粋に現在アートとしてモダンテクニックによる制作を行っている作家も数多くいる。

抽象表現主義の代表的な画家であるジャクソン・ポロックの作品には「ドリッピング」の技法が使われており、『No. 5, 1948』は現代美術品としては当時（2006年）の最高額の1億4千万ドルの値段がついた。

その他にも、モダンテクニックを語る上でその存在は欠かせない「フロッタージュ」の創始者マックス・エルンスト、墨の濃淡を駆使した「にじみたらし込み」の技法を得意とし江戸中期に活躍した日本人画家の伊藤若冲など、国内外を問わず枚挙に暇がない。今後は、モダンテクニックの活用と効果において、芸術性・表現力の向上に焦点を当て、その可能性を探っていきたい。

注

（１）日本文教出版：『ずがこうさく1・2下』，日本文教出版株式会社，2017，pp.8～9

（２）大橋 功、佐藤賢司 他：『美術教育概論（改訂版）』，日本文教出版，2009，p.17

(3) 山本和久：『児童の実態及び発達段階に応じた支援のあり方について ～発達障がいをもつ児童へのレジャ・エミリアアプローチを通して～』、2017年度愛知淑徳大学教志会研究年報第四号、2018、pp.217～230

(4) 日本文教出版：『ずがこうさく1・2上、ずがこうさく1・2下、図画工作3・4上、図画工作3・4下、図画工作5・6上、図画工作5・6下』、日本文教出版株式会社、2020

(5) 開隆堂出版：『ずがこうさく1・2上、ずがこうさく1・2下、図画工作3・4上、図画工作3・4下、図画工作5・6上、図画工作5・6下』、開隆堂出版株式会社、2020

参考文献

1 樋口一成編著：『小学校図画工作の基礎 ～造形的な見方や考え方を働かせる学び～』、萌文書林、2020

2 Herbert Read、宮脇 理 他訳：『芸術による教育』、フィルムアート社、2001